



港に臨む「芸術の館」

私のふるさと神戸で誇れるもののひとつが兵庫県立美術館、HAT神戸の一角にたたずんでいる。「芸術の館」はその愛称。多様な芸術活動をたゆまなく展開する



この円形テラスは、おすすめスポットのひとつ。ギャラリー一棟にもつながっている



海に面した外観は実に無駄がない。帰りにハーバーウォークも楽しめる

館者一〇〇万人を突破し、そろそろ五〇〇万人を数えるとのことである。大きなお金が動く展覧会

同館ではこの四月から五月末まで、「20世紀のはじまり ピカソとクレーの生きた時代展」を開催していた。

ドイツのデュッセルドルフにあるノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館の所蔵品の巡回展で、名古屋を東京を経て神戸にやってきた。この州立美術館の所蔵品は、パウル・クレーのコレクションはじめ、その質の高さはヨーロッパでも認めるところである。

今回、この展覧会を通して、館長補佐の越智裕二郎氏に、美術館の展覧会開催にいたるまでの過程、とくにお金の動きを伺うことができた。

今回の出展作品の総評価額は四〇〇億円までとして交渉が成立した。

この評価額が保険金算出の元となる。ところが、ユーロが上がり続けたところ、ユーロが一七〇円を突破。結局、ピカソの一点をあきらめて、海を渡るピカソは六点となった。

いよいよ作品が動くことになったが、巡回地がかわることに付き添いの学芸員と修復担当者は、その都度日本にやってきて移動を確認する。

にクレーの色彩感覚が凝縮されている。デジタル・ミュージアムでは味わえない感覚だ。

最後に越智氏に、今後の美術館の目標は？ と伺うと、ちよつと嬉しいことだが返ってきた。子どもたちに、この世の中にはいろいろな価値観があるのだ、ということを通じて教育できる美術館、なんてこの人はこんな不思議な絵を描いたんだろうねと、そんなコミュニケーションを子どもたちと深めていけるような美術館にしたい、とのことだった。

たかはし はるこ

高橋 晴子
大阪樟蔭女子大学 学芸学部教授

専門は、身体と装いの情報処理。民博のウェブ・サイトから〈服装・身装文化データベース〉を公開している。世界の身装情報の拠点づくりとファンタジー映画に関心がある。



よく利用されている美術情報センターは入り口のすぐそばに。とても明るいセンターだ



充実したミュージアム・ショップには魅力的なグッズがいっぱい



「20世紀のはじまり ピカソとクレーの生きた時代」の展覧会場風景